

「最近の若者は」という言葉を前置きとする意見は古代エジプトや古代ギリシャの時代から存在するといわれる。大半は若者の言動を批判する老人の見解である。しかし、明治維新の中心となった人物の多数は若者で、明治元年に伊藤博文は二七歳、大隈重信は三〇歳であった。平均寿命が短期であったことを考慮しても、完全に若者である。

G A F A に象徴される現在の情報経済を牛耳っている企業を創業した人々も若者であり、M・ザッカーバーグは二〇歳でフェイスブックを創業、S・ジョブズは二一歳でアップルを創業、L・ペイジとS・ブリンは二五歳でグーグルを創業している。明治維新と情報経済に共通する特徴は従来の社会と原理が激変したことである。

これから原理が巨大な転換をする分野は環境問題であるが、ここにも世界の先頭を疾走する若者が続出している。昨年九月の国連気候行動サミットにおいて、わずか五分の演説で世界に影響をもたらしたのはスウェーデンの一六歳の少女G・トウンベリさんで、世界の数百万人の若者が同調して登校を拒否した。海洋プラスチックごみ問題について、昨年のG二〇大阪サミットでは実効が疑問な政策提言を発表しただけであるが、オランダの若者B・スラットさんは大人の議論を尻目に、マイクロファンディングで四〇億円の資金を調達し、ごみ回収装置を製作して太平洋上で実験をした。成功はしなかったが大人にはできない行動である。

タイの首都バンコクは網目のような水路のある水上都市であるが、大量の生活ゴミが水路に浮遊している。現地在住の少女R・サティッターサーンさんはサーフボードで水路を航行し、一人でゴミの回収を開始した。その影響でプラスチック製買物袋の無料配布が中止となり、政府も使用を禁止する法律の検討を開始した。

ここに紹介した三人の若者に共通する意識は環境問題が自分たちの生活する世界の問題と理解していることである。それは昨年九月のサミットでのトウンベリさんの演説の「大人は子供の世代に問題を先送りしているが、私達は結果とともに生活していかなければいけないのである」という言葉に要約されている。

残念であるが、日本には上記で紹介したような世界に影響をもたらす若者が皆無とっていい状態である。その象徴がユニコーン企業の不在である。現状では上場していないが、上場すれば一〇億ドル以上の企業価値になると想定される情報関連企業のことであり、多数は若者が設立したベンチャー企業である。

現在、世界に約四〇〇社が存在する。国別では宇宙産業の「スペースX」や宿泊業務の「エアビーアンドビー」が代表するアメリカの企業が全体の五〇%、配車サービスの「滴滴出行」やニュース提供の「今日頭条」が代表する中国の企業が二五%であるが、日本のユニコーン企業は一〇〇位以下に三社しか登場しない。

原因は起業精神の不足というよりは危機意識の不足である。江戸末期に開国してみたら西欧諸国に大幅に出遅れ、植民地化の危機さえ存在した。その危機に対抗するために若者が必死で活躍した結果が明治維新である。現在の日本の情報技術や産業は世界に出遅れた危機にある。「最近の老人は」と豪語できる若者が頻出することが日本を発展させる条件である。